



サウディアラビア王国の国家形成と支配基盤 : 都市民と遊牧民の政治的役割に関する先行研究

中村, 覚

(Citation)

近代, 100:1*-42*

(Issue Date)

2008-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001746>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001746>



「サウディアラビア王国の国家形成と支配 基盤：都市民と遊牧民の政治的役割に関する 先行研究」

中 村 覚

- I はじめに
- II 政治学的アプローチ
- III 人類学的アプローチ
- IV 歴史学的アプローチ
- V むすびにかえて

I はじめに

本稿は、1932年のサウディアラビア⁽¹⁾王国(مملكة العربية السعودية)という国名⁽²⁾の宣言に結実する、サウード家・ワッハーブ主義⁽³⁾複合体制⁽⁴⁾に基づく国家形成の過程で支配基盤⁽⁵⁾となった社会階層を特定し、それらの社会階層が果たした政治的役割について明らかにする政治社会学的な分析を開始するため、先行研究をレビューする作業を行いたい。

国民国家論の中では、国家形成の契機として、同質性をもった「国民」の成立、国家の「領域」の決定、中央集権的な「中央政府」の成立の3つがあげられている。サウディアラビア王国の「国民」形成に関して筆者は既に試論を著したこともあり[中村 2001]、本稿では、サウディアラビア王国における中央政

府の成立に関する検討を主な検討課題として設定することとしたい。

サウディアラビア王国は、初代国王となるサウード家のアブドゥルアズィーズ・イブン・アブドゥルラフマン・アール＝サウード（عبد العزيز ابن عبد الرحمن آل سعود 1876/80年～1953年）によって、1902年から1932年の約30年の間に建国されたものである。ほぼ現在の領土を有するサウード家の支配が主権国家として国際的に正式に承認されたのは、1927年にジェッダ条約(Jeddah Treaty) をイギリスと締結し、以後、サウード家による支配を承認する国が続いたことによる。当時のサウード家の支配は、ヒジャーズ地方を占領することに成功し、ヒジャーズ政府を外国との窓口とし始めた時代であったが、まだサウディアラビアという国名を宣言する前であった。

アブドゥルアズィーズは、第二次サウード朝(1820年～1889年)の衰退期にあたる1876/80年⁶⁾に生まれ、その滅亡を目のあたりにした後、1891年以降は一族とともに首都リヤドを離れてクウェートで亡命生活を送っていた。1902年に奇襲作戦により首都リヤドをラシード家から奪回したことを皮切りに征服活動に邁進し、1925年12月マディーナを占領して現在の領土をほぼ獲得し終えた後、1932年9月23日に「サウディアラビア王国」という現在の国名を宣言した。

サウード家による支配が拡張し始めたきっかけは、サウード家の始祖ムハンマド・イブン・サウード(محمد ابن سعود)(1687/8年～1765/6年)と、ワッハーブ主義の開祖となるムハンマド・イブン・アブドゥルワッハーブ(محمد ابن عبد الوهاب)(1703年～1793年)⁷⁾の間で結ばれた1744/5年の盟約⁸⁾にもとめられる。イスラームを正当性の源泉として獲得したサウード家は、ジハードと位置づけられた征服活動を指揮して、シャリーア法を掲げる第一次サウード朝を樹立した。現在に至るまでサウード家は、ワッハーブ主義を支配イデオロギーとして、サウード家・ワッハーブ主義複合体制を保持し続けている。

サウディアラビア王国は、第一次サウード朝と第二次サウード朝⁹⁾の崩壊の後、サウード家によって三回目に樹立された国家である。サウディアラビア王

国は、いわば「第三次サウード朝」にあたるのだが⁽¹⁰⁾、本稿は、「第三次サウード朝」の成立だけに着目するのではなく、「国家の成立過程」を中央政府の成立過程と位置づける方法をとることにする。安定した支配を持続的に支えることができる中央政府の形成過程が始まったのは、18世紀中頃の第一次サウード朝（1744/5年～1818年）の勃興であったと位置づけられる。サウディアラビア王国の中央政府は、第一次、第二次、第三次の支配の間に断続があったにもかかわらず、制度としては歴代政権の統治機構を引き継ぎつつ、それを発展させた結果として成立しているからである。第一次サウード朝やワッハーブ主義が発生した歴史社会的な背景を探ると、15世紀以来ゆっくりと進行していた、アラビア半島の政治社会構造や社会構成の変化によって、中央政府の機構の様態が方向付けられてきたことが明らかとなるだろう。そこで本稿が分析の対象とする期間は、第一次サウード朝から第二次サウード朝を経て、サウディアラビア王国の「建国期」（1902年～1932年）までを中心とする。

本稿では、サウディアラビア王国の中央政府の形成に関して、政治社会構造や社会階層の構成の変化などの「内部要因」に着目して検討する方針を基本とする。「内部要因」に着目する理由は、研究史上の理由と、サウディアラビア王国の歴史的特殊性の理由の二つに求められる。研究史を概観すると、アブドゥルアズィーズが採用した外交政策については、まだ研究課題も残されているとはいえ、G・トロエラーやJ・ゴールドバーク[Troeller1976], [Goldberg1986]などによって研究成果があげられている。また英国の対サウード家政策の決定過程に関しても多くの研究がある⁽¹¹⁾。サウディアラビア王国の形成に関する国際関係論的な研究には一定の蓄積がなされている。そこで今後の研究課題は、サウディアラビアの政治社会構造の特質をどのように理解していくべきなのか、という点にあると考えられるのである。

歴史的特性に着目すると、サウディアラビア王国の中央政府の形成過程では、「外部要因」を第一の要因としては考えにくい⁽¹²⁾。サウディアラビア王国の領

土となったアラビア半島の中北部一帯「ナジュド(نجد)」⁽¹³⁾ は、19世紀から20世紀初めに、たびたびオスマン帝国の侵攻を受けたとはいえ、オスマン帝国や英国などの列強によって長期間にわたり植民地とされた歴史的経験はなかった。

また植民地化されることがなかったアラビア半島中央部では、オスマン帝国や英国が、遊牧部族を征服するための支援を与えたり、行政機構を整備する方策をサウード家にアドバイスしたことはなかった。建国期のアラビア半島は、資本主義システムには深く組み込まれてはいない段階におかれていたこともあり、「外部要因」は、中央政府の構造を決定した説明要因としては、その他諸々の説明要因の一つにすぎなかったと位置づけられるのである。サウディアラビア王国の建国は、主として「内部要因」によって方向付けられたと考えられる[酒井 1994: 218-219]。

ただし「外部要因」ではなく「内部要因」に着目しようとしているからといって、本稿は、アラビア半島が閉鎖的に孤立した、外部との連関を全くもたなかった地域であったと見なしているのではない。サウディアラビアの中央政府は、独自の発展を遂げていたとはいえ、それは「外部の変化」に対応するための改革でもあったし、外部からの情報、物資、人的資源の取り入れによって可能となったのでもあった。

サウード家は、内陸奥深くで閉鎖的な社会に閉じこもっていたのではなく、アラビア半島の激動の政治情勢に適応するために、アラビア半島の内外に情報ネットワークを張りめぐらせるなどの工夫を積極的に行っていた。ワッハーブ主義の実践も、ヒジャーズ地域や近代技術や英国との接触によって変化した面が多々みられた。

本稿の研究が始められた契機は、筆者が現代サウディアラビアを理解する理論的枠組を模索していたことに端を発した。そのため本研究は、サウディアラビア王国の建国期に関する研究ではあるが、現代サウディアラビアの政治的特質を理解する手がかりになることを目指して始められた。本稿は歴史研究でも

あるが、現在サウディアラビアについて考える際に障害となっている、歴史的バイアスや政治社会的な構造に関する認識上の偏りを一つでも多く是正する作業を重ねて行きたい。

本稿では、サウディアラビアの政治的特質に関する先行研究には、「部族政治」であると位置づける一派と、遊牧民の定住化の結果、「都市」が発生したり、「国家」が形成されたことに着目する一派に大きく分けることができることが明らかにされる。またこれらの2つの対立する流れは、政治学的アプローチ、人類学的アプローチ、歴史学的アプローチに分けられる先行研究の中から生じてきたことが指摘される。さらに先行研究の整理の結果、本稿の研究課題である、中央政府の成立における遊牧民と定住民の役割について議論することの必要性が明らかとなる。また本稿の研究課題を論ずる枠組みを構築するため、国家形成に関する諸理論についても検討が行われる。

II 政治学的アプローチ

本節では、政治研究者による、サウディアラビア政治に関する先行研究についてまとめを行う。基本的には政治学者は、すでに存在している国家の研究には関心が高いが、国家形成期に関してはほとんど関心を払うことがない。政治学者によるサウディアラビア政治に関する研究では、主たる分析は、1932年の国名宣言の後の時期に向けられている。

サウディアラビアの政治学的特性については、部族政治であるという指摘がもっとも多く目に着くが、そのような指摘をしてきた研究者には、H・ラックナー、F・ハリディー、M・C・ハドソン、M・アビル、冨塚俊夫、保坂修司、K・A・チャウドリー、N・N・アユービーなどがあげられる。政治学者によるサウディアラビア政治に関する研究では、実証的データが十分に提示されていない上に、「部族政治」とは何なのかについての定義が明確にされていないという問題が

ある。本節では、政治学者による先行研究を検討しながら、彼らが、サウディアラビアの部族政治の特質であると意図しているものはどのような政治的特質なのか、考察する。

ラックナーは、サウディアラビアの部族政治は、20世紀まで続いてきたと断言している。

サウジアラビアの国家機構について議論する際に重要なのは、…〔サウディアラビアが〕二十世紀までは純粋な部族社会であったことを銘記することである[ラックナー 1981: 101]。

(以下、[] は筆者による補足)

ハリディーは、サウディアラビア政治の起源は、部族政治であったとして以下のように述べている。

近代サウジアラビアは、十八世紀の闘争の中から興隆した。この時期半島北部が東アラビアのナジドから出現したサウード族の率いた部族連合によって一時統一された[ハリディー 1982: 32]。

ハリディーは、現在のサウディアラビアには「部族的」暴政がみられるという。

アメリカにとって極めて重要なこの政権〔サウディアラビア〕には、最も劣悪な部族的暴政と外国支配の最新の弾圧技術の統合された、国内弾圧策が顕著にみられる[ハリディー 1982: 50]。

ハリディーは、18世紀の第一次サウード朝は部族連合によって統一されたも

のであり、現在のサウディアラビア王国でも部族的暴政や国内弾圧策が顕著に見られるという。だが彼のいう「部族」は、決して明確に定義されているわけではない。

ハドソンは、サウディアラビアの政治を「部族的神権政治 (tribal theocracy)」と位置づけた。ハドソンは、アブドゥルアズィーズ初代国王は、「アラビア半島の中央地域の全土に及ぶ政治的秩序を事実上初めてつくりあげるために、イスラームに立脚し、姻戚関係を利用した」と指摘している[Hudson 1977: 169]。

ハドソンの議論には、以下のような曖昧な論点がある。第1に、彼は、「部族的神聖政治」と述べるサウード家の支配を「イスラーム的親族規範 (Islamic kinship norm)」に基づくと述べているが、イスラームと「親族規範」がどのような関係にあると意図しているのか、明確に説明を与えていない点である。

第2に、アブドゥルアズィーズが姻戚関係を利用した、と述べているが、彼の妻が何名で、どの部族と姻戚関係を結んでいるのかなどの「アラビア半島の全土に届く姻戚関係」の実態については全く検証されていない。ハドソンは、別の箇所では、サウード家の支配を「結婚とパトロネージのネットワーク」と表している[Hudson 1978: 175]。姻戚関係の形成は、政治的秩序をつくりあげるために必要不可欠なことだったのか、あるいはどの程度まで重要とされていたのかについても議論していない。

第三に、ハドソンが用いる親族に関する用語は、適切に定義されていないように見受けられる。彼は「伝統的な部族や家族を基盤とした支援」という表現を用いているが、「部族」と「家族」の政治における機能上の区別はなされていない。「サウード家」に関しては **family** という用語で示している一方で、サウード家の中では、スダイル家を母方にもつ者はサウード家の一部でしかないのだが、「スダイル・クラン (clan)」と表している[Hudson 1978: 169, 175, 181]。

人類学では、世帯、リネージ、クランなどの集団に関するほぼ共通の見解とも言える定義が設定されている。例えば世帯とは、夫婦とその親と子供の3世代

までが同居するものとされる場合が多い。リネージとは、系図を明確に辿ることが出来る人々から構成される親族集団であると定義される。またクランとは、明確な系図を辿ることはできないが、共通の先祖を共有していると考えられる人々から構成される親族集団と定義されている⁽¹⁴⁾。

ハドソンは、サウード家を家族(family)、スダイル家をクラン(clan)と位置づける表現を行ったが、クランが家族の一部を構成することが可能な定義はありえない。サウード家やスダイル家は通常の一般的な呼称では「世帯(أسرة)」と呼ばれているが、もしサウード家をその親族体系の実態に基づいて定義するならば、家族(family)でも部族(tribe)でもなく、おそらくリネージが適当であろう。

サウディアラビア政治が「部族的」であると見做される一因には、サウード家は、西欧人やサウディアラビア人以外のアラブ人などの目には、極めて異常であると感じられるような事実があるからかもしれない。アブドゥルアズィーズ初代国王は男子だけで46名の子供をもうけたし⁽¹⁵⁾、サウード家の総数は現在では5千～2万人に達していると推測されている[Metz 1993: 204]。このような国王の子供の多さや一族の規模の大きさが、「部族政治」という印象を与える根拠の一つかもしれない。

だがこのような事実と社会科学上の概念としての「部族」は、まったく別の問題である。一人の人間が設けた子供の数や一族の数に基づいて、部族を定義した研究者はいない。中国などの親族集団では、一族の数が何万人になろうとも、「部族」や「クラン」ではなく、「リネージ」と位置づけられる場合は普通にみられる。以上のような人類学の研究蓄積を全く踏まえていないと考えられるハドソンによる部族に関する概念の用い方は、明確さに欠けていると言えるだろう。

政治研究者や歴史研究者による部族研究における部族の暫定的な定義については、ある一つの傾向がみられる。彼らの多くは、部族について「部族、支族、氏族、拡張家族、家族」などの階梯に分かれているという。また部族が系譜に

基づいているということが、実際には「意識上の」ことであつたり、「虚構」であるということを指摘する⁽¹⁶⁾。

だが彼らは、「存在している」部族の紐帯が「系譜上の虚構」であるということと、「部族という政治形態の存在や集団単位の行為が虚構」であることの差異には十分に自覚的ではないように考えられる。最も重要な点は、「シャンマル」という部族名を姓として冠する人々がある地域に存在して共同体を構成していても、彼の間には政治的統合性が希薄である場合や分節政治システムが機能していない場合がありえることを見逃しがちである。「シャンマル」という「ガビエラ(قبيلة)」(部族)の名称を冠していても、実際の政治集団としての行動は、リネージや家族といったレベルまでしか存在していない場合が実際に数多くあるのである。

分節政治システムが機能しているのかどうかという判断については、資料や情報源の問題で困難な場合も多分にある。ある部族について、その系譜は比較的容易に発見されるので、系譜上の階梯構造は同定しやすい。だが実際にはどのような政治形態をとっていたのかということをはっきりさせるためには、さらに数倍の研究上の労力が必要となる上に、何一つ明らかにできないという徒勞の結果となる場合が多々みられるだろう。とはいえサウード家に関する基本的な情報は、多くの出版物の中に掲載されていて入手も決して難しいものではない。ハドソンの議論は、概念の定義づけの問題でも、基礎的な情報収集の上でも問題をはらんでいるのではないか。

ところで部族集団は、国家や中央政府の中で政治的集団として存在しながら、隠然とした影響力を行使したり、役職の争奪戦を行っているという指摘が多々見られる。

アビルは、サウディアラビアの政治的意思決定における部族的指導者の役割について議論している。アビルによれば、サウディアラビアの政治は、「解き結ぶ人々」(أهل الحل والعقد)と呼ばれる、王族、ウラマー、部族指導者からの代表者、

計約150名によって構成される会議が国政に関する決定権をもつ寡頭政治であるという[Abir 1987: 155], [Abir 1988: 9-11], [Abir 1993: 7-10]。富塚俊夫も、サウディアラビアの政治は、王族、ウラマー、部族長から構成される「鉄の三角形」が意思決定の中枢にあると論じた[富塚 1991]。保坂修司は、『イスラーム+部族制』と『近代』のあいだの均衡が、サウジアラビアの政治の舵をとってきたといってもいいすぎではない」と述べ、静態的なモデルを支持している。ただし彼は、「部族制の影響が低下しつつあることは否めない」とも述べているが、それ以上の検証作業はしていない[保坂1996: 154]⁽¹⁷⁾。

建国期のサウディアラビアでは、「王族、ウラマー、部族長」が支配階層を形成していたとする見解は多くの研究者によって示されているが、G・ゴーズ三世は、アビルによる「解き結ぶ人々」に関する分析は、何ら信頼できる資料に基づいて議論が展開されていないと批判している[Gause III 1989: 570]。実際のところ、サウディアラビアのように史料が豊富ではなく、また現在でも情報開示に限界が大きい国では、政治的意志決定の過程は、ブラックボックスのような印象が特に強い。

チャウドリーは、「[サウディアラビアの]財務省は、アナザ族が支配している」と述べている[Chaudhry 1989: 126]。またアユービーは、「[ワッハーブ主義運動の]社会的基盤は、正確には理解されていない」と述べる一方で、「湾岸諸国的なコーポラティズムとしての部族」が存在していると述べている[Ayubi 1999: 127]。

しかしチャウドリーやアユービーは、どの部族が、どのような政治組織を形成して、どのような利害を表出する利害集団となっているのか、あるいはどのような政治的活動を展開しているのかについて、何ら具体的なデータを提示していないのである。

最も詳細にデータを提示しながら、サウディアラビアの支配階層の変化に注目したのは、A・ヤーシーニーがあげられるだろう。彼は、サウード家、シャ

イフ家(الشيخ)⁽¹⁸⁾、閣僚の構成の変化に着目して、1950年代のサウディアラビアは「世俗化(secularization)」が進行していると論じた[Yassini 1985: 97-105]。だが一方で、1950年代までのサウディアラビアについては、これまでとりあげた研究者と同じように、データを提示しないままに、王族と部族リーダーが政治的エリートであったと述べている[Yassini 1985: 81]。

サウディアラビアが「世俗化している」というヤーシーニーの結論は、3つの問題点がある。1つ目に彼は、1950年代以前に、宗教関係者以外の人材が官僚に登用されていたという点を議論に取り上げなかった。2つ目に、宗教教育以外の教育を受けた経歴を持つ閣僚が、果たしてワッハーブ主義を放棄しようとしているのか否かを問わないままに、経歴だけから判断して「世俗化」が進行していると断定した。3つ目に、ヤーシーニーは、シャイフ家の中から宗教関連以外の職種に就く者が増えているので「世俗化」が進行したと示唆しているのだが、シャイフ家以外からサウディアラビアのワッハーブ主義を担う人材が輩出されている可能性については考慮していない。ヤーシーニーの議論は、建国期のサウディアラビアの政治的特性を、サウード家とシャイフ家が中心となった、宗教と部族による支配であると位置づけたため、1950年代以降の政治状況の分析に関して、慎重さを欠いた方法で、「近代化」と「世俗化」に着目する分析結果となったのだろうと考えられる。

人類学では、E・E・エバンス=プリチャードを嚆矢として、中央政府が存在しない社会の政治形態として、複数の部族が均衡を維持して秩序を形成するという、分節システム論を展開してきた経緯がある。だがその一方で、国家の中に中央政府と政治集団としての部族が併存している事例に関する研究も蓄積されている⁽¹⁹⁾。アユービーは、国家官僚と部族集団が併存するものである、と主張している点で重要な研究課題を改めて示唆したとも言える。国家が形成された後で、部族集団が有力な政治勢力として残存しているという点は、リビアの国家形成について研究したA・アンダーソンも指摘している[Anderson 1991:

しかし、国家の中に存在している親族集団が「部族」と定義できるのか否かは、慎重に検討されなければならないと考えられる。先にとりあげた、ラックナー、ハリディー、ハドソン、アビル、チャウドリー、アユービーなどは、サウディアラビアの政治を部族政治であると言及しているが、部族政治の特質に関して明確な定義づけを行った研究が一つもない上に、十分に実証的なデータも提示されていない。彼らの研究は、現地での調査研究や資料収集を行わずに、欧米の新聞や雑誌で報道された記事を主要な資料としている点が共通している。また第II節以降でとりあげるが、先行研究の中には、サウディアラビアの政治社会的発展の特質を「都市性」や「国家の成立」に求めるものがあるが、それらに関してはほとんど言及していないという特徴がある。

本節で引用してきた、サウディアラビア政治の特質を部族政治であると断定する研究者の理論的背景を指摘するなら、ラックナーはマルクス主義、ハドソンは、1960年代から1970年代に隆盛を極めた、政治学における構造機能主義的近代化論に依拠しながら議論を展開している。

マルクス主義や構造機能主義的な近代化論は、「近代と伝統（前近代）」を対置し、近代化によって伝統が置き換えられていく、という前提に基づいている。構造機能主義的政治論は、「民主主義＝近代」、「非民主主義＝前近代」という二項図式にも依存している。これらの諸前提は、ラックナーやハドソンが、民主主義でもなく、議会制でもないサウディアラビア王制は、前近代の伝統に基づくアナクロな政治、すなわち部族政治であるという先入観だけに囚われてしまう原因の一つとなってしまう、と考えられる。彼らは「部族政治」というラベルによって、「後進的な政治」という暗黙の意味を込めているように考えられる。

これらの政治学者は、「伝統」という概念について「旧来から存在する不変なもの」と理解しており、伝統が「創造される」あるいは「再生産される」概念

であることに關して十分に自覺的ではない⁽²⁰⁾。このような、伝統に關する彼らの理解は、彼らがサウディアラビア政治において發生してきた変化に着目せず、サウディアラビア社会を18世紀から現在まで不變の社会であると位置づけた一因となつたのだらうと考えられる。

マルクス主義や構造機能主義などの方法論が、政治学の中で主要な方法論を形成し、重要な議論を積み重ねてきた実績を否定しようとしているのではない。だが、欧米とは異なる条件におかれ、独特の歴史的発展過程をもつサウディアラビアに關して議論する場合には、そのような独自性を配慮せずに、近代政治学の概念枠組みを適用するような研究方法がどれほど有効なのだろうか、という問題が生じてくる。当然ながら、ある地域の政治について理解するためには、オリエント＝伝統＝非民主主義＝前近代、という既成概念を一旦取り払ったうえで、固有の環境の制約の中で生じた社会的発展を実証的に理解することが求められるはずである。

さらに欧米の研究者ばかりではなく、アラブ人の研究者も、サウディアラビア政治を部族政治であると位置づけている。すでに引用したアユービーなどのアラブ人研究者は、サウディアラビアの政治を部族政治であると位置づけるが、彼らは、エジプトやシリアなどの彼らの本国よりも、ナジュドを後進的な地域であると見做していると考えられる。

ドイツやアメリカを主な活動の場としてきたシリア生まれのB・ティービーは、ワッハーブ運動を「古代的(archaic)」と論じているが、その根拠として、7世紀以来アラビア半島の社会は停滞していると述べる、以下のようなP・ハートマンによる1924年の研究の一節を引用している。1924年は、まだサウディアラビア王国の建国が達成されていなかった時期である。

宗教運動としてのワッハーブ主義は、アラビア半島における社会的状況が預言者ムハンマドの時代からほとんど重要な変化が何も起きていなかったと

いう事実の文脈からしか、理解できない[Tibi 1997: 89]。

サウディアラビア人の G・A・ゴサイビーは、サウディアラビア人以外のアラブ人によるサウディアラビアへの眼差しについて、以下のように指摘している。

アラブの大都市の人々の見解によれば、マッカとマディーナを除いたアラビア半島は、残忍で野蛮な部族が住む砂漠である…どの時代の定住民の子ども、街の壁の外側で待ち受けていて子供を誘拐するベドウィンの物語を語られてきたのである…[Algozaibi 1991: 104]。

第II節で紹介されるように、サウディアラビア社会の構造的な変化を強調する研究が現れ始めている。それらは、ヒジャーズばかりではなく、ナジドやアフサー(الأحساء)⁽²¹⁾でも、15世紀から始った遊牧民の定住化の波が継続した結果、18世紀の終わり頃からは都市が形成されるプロセスが始まっていたと論じている。しかし政治学者は、定住化や都市化、あるいは部族集団の政治的特質の変化といった歴史的なプロセスを分析することには、ほとんど関心を払ってこなかったとまとめることができるだろう。

どんな先進的国家にも「後進的」であると考えられる政治制度や慣行があるものである。特にサウディアラビアは、石油ブームの後に急速な社会発展を遂げた国であるから、多くの後進性があるといってもまったく言い過ぎではない。しかし、後進的な一面に目がとらわれるあまりに、政治構造の本質的な部分について見落とししたり、議論を歪めることになってよいはずがない。サウディアラビアの政治的特質に関する研究では、政治学者によって、「不変の部族政治」のイメージが醸成されてきたが、その実態に関しては十分な議論が試みられてこなかった。また彼らは、人類学や歴史学における研究成果を取り入れようともしてこなかったのである。

III 人類学的アプローチ

本節では、人類学における部族政治に関する理論に関して概観した後、サウディアラビアにおいて行われた人類学的な先行研究について検討する。

III.1 人類学における部族の定義

P・タッパーによれば、人類学における諸研究では、「部族」概念には、3つの主要な定義があるとされる。1つ目は、植民地化される以前の「原始社会」と同義に用いられる部族である。これは、部族を共通の言語や慣習法などを共有する文化集団として定義する一方で、国家のような合理的な政治的仕組みをもたない集団であると位置づけることになる。

2つ目の定義は、新進化論によって提示された政治的發展の一段階としての部族である。E・P・サーヴィスに代表される新進化論では、一定の社会的条件が備わったときに、バンド社会が部族社会へと発展し、さらに首長制社会や国家社会へと発展する可能性がある、とされる。この中で部族は、狩猟採集民による小規模なバンド社会と、首長制社会や国家社会との中間の段階に位置づけられる、親族を中核とした政治形態として定義される。

3つ目の定義は、領土によって定義される政治集団としての部族であり、部族集団は、地域における紛争解決のためのメカニズムとして位置づけられる。一つの部族は、一定の地域を占める領域的集団と定義される。部族は、下位集団に分節化されている。これらのすべての分節は、クランから構成されている。親族集団は、分節的階梯を構成するそれぞれのクランの中で支配的な地位を占めているが、クランと親族集団の構成員は、必ずしも一致しているわけではないことも指摘されている。またこのような分節システムをもつ社会は、国家と

は異なり、中央政府をもたない社会であると考えられている[Tapper 1991: 50-51]。

近年人類学では、「部族」に関する研究が蓄積され、部族社会の多様性が議論されるとともに、部族の定義づけがきわめて困難であることが強調されている⁽²²⁾。明確な定義を与えることが難しい多様で複雑な実体をもつにも関わらず、部族概念が繰り返し使用されてきた背景としては、西洋植民地主義的な偏見が強く影響した点が指摘されている。植民地経営に乗りだし始めた列強は、現地の人々を原始的な「部族民」と見做し、戦乱状態におかれ、発展から取り残された人々であると位置づけて、自らの植民地経営は現地民に平和と発展を与えるためであると正当化したのだという⁽²³⁾。現在では人類学では、「部族」という概念と「民族」という概念との間には、明確な区分を設けることは不可能であるという主張がされるようになっていく⁽²⁴⁾。

ただし部族概念の成立における西欧植民地的な偏見の作用の程度に関しては、植民地勢力によって部族の形成が進んだような地域と、植民地化以前から「ガビーラ (قبيلة)」⁽²⁵⁾あるいは「アシーラ」(عشيرة)概念が存在している中東、中でも植民地化されたことがないアラビア半島中央部の場合などは、異なるケースである可能性を念頭におくべきではないか、という点を指摘しておきたい。

tribe と「ガビーラ(アシーラ)」が同一の概念であると見做すことはできないにしても、tribe は、「ガビーラ(アシーラ)」の訳語として使用される頻度が最も高い概念である。アラブでは「ガビーラ(アシーラ)」概念は植民地化以前から存在しており、このことは、「部族(tribe)」概念に類似すると見なされるような社会構造が、西欧による植民地化以前から存在していたことを示していると考えられるだろう。

古来、アラビア半島では、「ガビーラ(アシーラ)」は差別される原因とはならず、むしろ誇りの源泉であった。アラビア半島の部族は、「高貴な系譜をもつ部族(أصيل)」と、系譜が卑しい部族に分けられていた。アラビア半島では、自分の

先祖がアドナーン族やカフターン族という高貴な血筋へと系譜を明確に辿れることは、誇りであると考えられていた。他方、「ハディーリユーナ(خطيريون)」⁽²⁶⁾と呼ばれる系譜を明確に辿ることができない「非部族民」は見下される状況が存在していた。またヒジャーズやオマーンなどの市場を通じてアフリカから運ばれてきた奴隷もまた、身分が低いものとされていた。

多くの場合、「高貴な系譜」を誇示する遊牧部族は、勢力が大きく屈強であり、「系譜が卑しい」とされる弱小な部族を軍事的に支配して、徴税などを行っていた。また「高貴な系譜」の部族の人々は、「系譜が卑しい」部族民や非部族民の人々と決して結婚しようとはしなかったという。アラビア半島のローカルな部族的価値観では、部族民であることが差別の対象とされたのではなく、系譜の良し悪しや軍事力の強弱などが、誇りや差別意識に関わっていた。アラビア半島の「ガビーラ(アシーラ)」概念は、植民地化や差別の結果として発生したのではなかったと言えるだろう。

III.2 部族集団の優位を強調する先行研究

サウディアラビアで行われた人類学的な研究の結果は、二つに分けることができる。1つ目は、サウディアラビアの政治が部族政治であると述べる研究である。2つ目は、サウディアラビアの人々は、部族よりも国家に対して第一義的な政治的忠誠を誓っているという見解に立つ研究である。前者は、出版され、研究史における影響力が大きいが、後者は、米国の大学で提出された博士論文であるが未出版であり、研究史における影響力は、前者に較べると極めて限定的な状況におかれている。

サウディアラビアの政治が部族政治であると述べるのは、サウディアラビアの遊牧部族について研究した D・P・コウルと W・ランカスターである。彼らは、それぞれ、サウディアラビア南東部のムッラ族 (المُرَّة) と西北部のルワーラ族

(الروالة)を調査した。どちらの研究者も、サウディアラビアの遊牧部族民は、近代化や国家官僚化の時代的趨勢の中におかれながらも、国家よりも、所属する部族への帰属意識が強いことを示唆している。

部族は第一次的な政治的帰属単位であることに変わりはなく、人びとは個々の市民としてよりも、部族の成員として自らを国家に関連づけている[コウル 1982: 135]。

ルワラは、彼らの家畜の群れをつくりあげ、いかなる国家の市民となることも拒否することによって、[都市民 townsmen との] バランスを維持しようとしている[Lancaster 1981: 162]。

サウディアラビアでは1950年代から遊牧民の定住化が進んでいる。コウルとランカスターの研究には、研究における方法論上の相違も存在するが、1960年代から1970年代に定住化の潮流から後れをとった、辺境に位置する遊牧部族を調査対象として選択したという点では共通している⁽²⁷⁾。したがって両研究者が、所属する部族への忠誠が国家への忠誠を上回るという指摘を行った理由は、彼らがそのような結論を導きやすい研究対象を敢えて選択したからであると言える。このため、彼らの研究はサウディアラビア全体の傾向を捉えきれない結果となったと言える。彼らは、砂漠のベドウィンにロマンを感じて研究に従事した面があったかもしれない。

とはいえ、ほぼ同時期にサウディアラビアで人類学的調査を行った片倉もここは、サウディアラビアでも既に少数派となった「純粋な遊牧部族」ではなく、サウディアラビア西部のワーディー・ファーティマ(وادي فاطمة)で、ベドウィンの定住化のプロセスについて研究した。片倉は、ベドウィンの間に部族アイデンティティーが根強く残存していることを指摘しているが[Katakura 1977:

25-26, 48, 53-55]、国家への忠誠心と部族への忠誠心のどちらが強いのか、などの政治集団としての部族の特質に関しては言及していない。

III.3 「部族解体」や遊牧民の定住化について論ずる学説

サウディアラビアでは、国家の成立以後、「部族(tribe)」はもはや政治集団としての機能を喪失したと結論する研究がある。このような研究は、遊牧民が定住化を進め、政治集団としての遊牧部族は解体されていると論ずる。以下でとりあげていくが、これらの研究は、研究史上において影響力をこれまでもたなかったが、その理由は、ほとんどが未出版であるためだと考えられる。

これらの研究は、サウディアラビアにおける遊牧部族の定住化のプロセスを二つの段階に分けている。第一段階は、建国期の1912年から1930年に行われたイフワーン運動における定住化、第二段階は、1950年以降に始まった自発的な定住化の波である。

Y・ファビエッティとT・ファッラは、建国後のサウディアラビア全土における遊牧民の定住化の傾向について論じた研究を残している。ファッラは、「部族解体(detribalization)とは、部族を離散させ(break)、それらを混合させ、土地に定住させ、部族への忠誠心(loyalty)を地域や国家への忠誠心と代替することである」と定義し[Farra 1973: 7]、その過程や要因を研究した。

M・S・ハッダは、1970年代にサウディアラビア東部とクウェートに居住するアジュマーン族(العجمان)に関して研究した。ハッダは、「忠誠心」という概念は使用しなかったが、部族集団の分節政治システムとしての機能の変化などについて指摘した。

ハッダによれば、「サウディアラビアのアジュマーン族の人々は、部族名ではなく、リネージ名を名乗り始めた。クウェートのアジュマーン族の人々は、家族名を名乗っている」という[Hadda 1981: 145]。また「クランは解体し、クラ

ン名を覚えているものすら稀となった」[Hadda1981: 162]。そして「部族の統治権は、政府の統治権とおきかえられ」、「定住したことにより部族長の力は低減した」という[Hadda1981: 245-247]。ハッダの研究においては、サウディアラビアのアジュマーン族では、分節政治システムとしての機能は既に喪失され、「部族」やクランといった集団レベルは、政治集団としての機能は希薄化していることが窺われる。

A・M・サフラーンは、1960年代後半のサウディアラビア南西部の山岳地帯バーハ(الباحة)における部族指導者の政治的役割に関して研究した。彼によれば、部族指導者は、かつての独立した政治集団の長として戦争や遊牧を指揮する権限を喪失し、国家官僚と住民の間の橋渡しとしての機能しか果たさなくなったという[Sefran 1974]。

遊牧部族の定住化に関する研究の中には、政治的な変化に関する議論をほとんど行わず、定住化の社会経済的な側面に特化したものもある。それらは、先にあげた片倉もとの他に、A・A・シャメフやS・A・ハティーブなどがあげられる。シャメフは、1920年代と1950年代のガッシームにおける遊牧民の定住化について研究した[Shamekh 1975]。ハティーブは、1920年代と1950年代におけるリヤードの西側のガトガトにおけるウタイバ族の定住化に関して議論した[الخطيب 1981]。S・トルキーとコウルは、ナジュドの「オアシス社会の定住民の研究」の事例として定住地ウナイザ(العنيزة)をとりあげた[Altorki & Cole: 1989] (28)。

本節で議論してきたように人類学的な研究には、サウディアラビアの「純粋な遊牧民」に関する研究と、「遊牧民の定住化」に着目した二つの方向性がある。ただし人々が「部族」と国家のどちらに強く「帰属意識を持ったり」、「忠誠を誓う」のか、という意識の問題に固執するのは、建国期を扱う本研究にとっては検証不可能な不毛な議論となるだろう。むしろ本稿の目的に適切な問題設定は、定住化や都市化といった社会変化が、政治集団としての部族の統合性や機

能、あるいは中央政府の形成過程に与えた影響を論ずることである。

IV 歴史学的アプローチ

前節までの検討で、サウディアラビア政治に関する研究では、2つの大きな対立する傾向があることが明らかとなった。「サウディアラビアは部族政治である」という説は、十分な資料や考察に基づいていない政治学者や、遊牧民を調査した人類学者によって展開されてきた。他方、遊牧民の定住化に関する人類学的研究は、サウディアラビアの人々は、部族ではなく、国家への忠誠を誓うと指摘していた。

本節では、第一次サウード朝からサウディアラビアの建国期までのアラビア半島に関する歴史研究についてとりあげ、部族政治や国家形成についてどのように論じられたのかを検討する。その結果、歴史学的アプローチをとる先行研究についても、「停滞した部族社会」の歴史観を再生産することに貢献したものと、アラビア半島における「都市社会の発展」を論ずるものに分類できることが示される。

サウディアラビア王国の建国史に関する著作では、初代国王アブドゥルアズィーズが果たした役割を中心に据えながら、議論を進める研究や年代記が数多くある。これらの研究や年代記は、必ずしも全てがアブドゥルアズィーズ国王についてだけの記述ではない上に、多くの歴史的イベントについて書き残しているが、政治社会構造を主たるテーマとしてとりあげて明らかにしようとはしていない⁽²⁹⁾。

アブドゥルアズィーズに関する伝記を記した J・ブノアメシヤンは、「動」と「不動」の繰り返しがアラビア半島の数千年の歴史だったと考えている。「動」とは、イエメンからアラビア半島北方への遊牧が行われたり、それらの遊牧部族の間で闘争が激しく行われることを指している。また預言者ムハンマドが出

現してからアッパース朝までのイスラーム帝国の時代を含む、歴代諸王朝の興隆期の時代を指している。ブノアメシャンは、それらのような「動」の時代の後では、「静」と位置づけられる、衰退と停滞の時代が繰り返し現れたと考えている[ブノアメシャン 1990: 1-2, 49]。

ブノアメシャンは、サウード家の興亡についても、「動と不動」、あるいは「反復されるリズム」をモチーフにして描いている。第一次サウード朝以前のナジュドは、イエメンからアラビア半島を北上する遊牧民の間で戦いが反復される場として描かれている。しかし彼は、単なる反復を超えた社会変化がナジュドで起きていたとは考えていない⁽³⁰⁾。

「シャイフ」の伝道に関しては、「千年のアラビアの歴史を消して」、「マホメットが出発したその点にまさしく戻ったのである」[ブノアメシャン 1962: 56]という。第一次サウード朝は、激しい変革の時代であるが「不動」の一面が強調されていると言えるだろう。そして第一次サウード朝が滅びた後に再興された第二次サウード朝は、「不動への新たな回帰」の時代だったという[ブノアメシャン 1962: 63]。第三次サウード朝は、再び「動」の時代となったと考えているようである。

歴史を描こうとしているブノアメシャンには、一概に「繰り返し」だけを強調しているとは断定しがたい面がある。しかし彼が、サウード家による支配の確立に先立って、不可逆的と言える社会的な発展があった可能性については、全く思考をめぐらせていないことは確かである。なぜなら彼は、「シャイフ」やアブドゥルアズィーズ国王について、分裂し停滞する部族社会に突如として出現したものとして描いているからである。ブノアメシャンは、砂漠の部族やベドウィンの歴史に躍動感と停滞を見いだしていたのである。

また小串敏郎は、18世紀から現在までのサウディアラビアについて年代記的な記述に徹した著作を著したが[小串 1996]、ひたすら続く政治闘争の場としてサウディアラビアを描き出そうとしたようである。

アブドゥルアズィーズに関する伝記だけではなく、ワッハーブ主義の発生に関する先行研究も、アラビア半島の政治社会的な停滞のイメージを強める結果をもたらしてきた。それらは、「シャイフ」の伝道には、政治社会的な変化が背景として存在していなかったと論ずる。また彼の改革運動については、新たな教義解釈の伝道のみを目的としていたのであり、政治社会的な改革の意図は全くなかったという見解が通説とされてきた。

A・ダッラルは、以下のように、ムハンマド・イブン・アブドゥルワッハーブによる改革運動の目的は、イスラーム教義の改革であり、政治社会的な目的が全くなかったと述べている。

彼の敵は、アッラーに関する異なる信仰をもつムスリムであって、ムスリムを抑圧する圧制者ではなかった…社会に関する関心は、ワッハーブの書物の中からは抜け落ちている。独裁のみならず、小さな事柄における社会的公正も、メリットがないことなのである…彼の信仰を普及させるためには、地域の支配者に頼らなければならなかったにも関わらず、彼は、教えを政治的な言葉で語ることはなかった…彼は、信仰と政治を分離する…[Dallal 1993: 349-350]。

II節では、ティービーが、ワッハーブ主義は、7世紀以来、アラビア半島には社会的発展がなかったから出現したと考えていることを引用した。彼は、以下のように、ワッハーブ主義は「ベドウィンの規範」を広めるために行われたと考えている。

[ムハンマド・イブン・アブドゥルワッハーブは、]ベドウィンの規範と生活様式を広めるために、イスラームにおける全ての文明的な要素の価値を否定した[Tibi 1997: 89]。

「シャイフ」が広めようとしたという価値観は、「ベドウィンの規範」だったと同時に「イスラームの全ての文明的要素を否定する」価値観、すなわち「反文明的」な価値観と見なされていた。またティービーは、以下のように、「シャイフ」は、政治的関心からではなく、宗教教義上の異議申し立てのためにオスマン帝国に敵対したとも指摘している。

イブン・アブドゥルワッハーブは、オスマン帝国の独裁体制ではなく、その退廃や墮落に異議を唱えたのである[Tibi 1997: 88]。

宗教学者である W・C・スミスも、ワッハーブ主義は、宗教的墮落を古典的なイスラームの復活によって改革しようとした運動であると位置づけた。彼は、ワッハーブ主義がオスマン帝国に敵対した理由は、宗教教義上の敵対のためであったと指摘している[スミス 1974: 42-43, 348, fn.2]。

ティービーとスミスのどちらも、ワッハーブ主義の発生を当時のナジュドの政治社会的な状況の中に位置づける視点を欠いている。アラビア半島には7世紀以来、社会的発展がなかったと位置づける見解は、ワッハーブ主義がベドウィンの価値観に基づいていると見なす見解や、ワッハーブ主義は7世紀の宗教的理想を復活させようとしたと位置づける見解と一体となっている。ワッハーブ主義は宗教教義上の異議申し立てのためにオスマン帝国と戦った点が強調されている。

ワッハーブ主義がある時代に特有の政治社会的な事情を背景として出現したことに気が付きにくくさせているのは、ワッハーブ主義の宗教学者や歴史学者でもある。1980年サウディアラビアのイマーム・ムハンマド・イブン・サウード大学で開催された「シャイフ」に関する研究シンポジウムの成果をまとめた2巻本の最初の論文では、以下のように、彼の伝道の目的は、イスラーム世界で失わ

れつつあった永遠不変なイスラームの価値観を再度確立することであったと述べている。

これ[ムハンマド・イブン・アブドゥルワッハーブのタウヒードの教え]は、アッラーが預言者ムハンマド(彼の上にアッラーの祈りと平安あれ)を遣わして、伝えようとした宗教そのものである。しかし、アッラーが預言者を遣わせた教えに関する無知が、アッラーの御心に反して、このウンマに広まっていた[نقرة 1983: 56]。

以上のような「アラビア半島停滞論」が通説となってきた一方で、サウディアラビア王国の建国期における、社会的変化について検討を行おうと試みた研究がある。それらは、2つに分けられる。1つ目は、遊牧部族民の役割について中心的に論じた研究である。2つ目は、定住化、都市化や商人の役割に関して中心的に論じた、新しい研究の潮流である。サウディアラビア史研究で代表的であるA・バシリエフは、部族構造やウラマーの双方に目配りをした歴史的な検証を試みて高い評価を得ているが、定住地の増加、都市化、商人の役割に関しては言及がない[بسليف 1986]。バシリエフが研究していた当時の史料上の制約が主因であろう。

主に遊牧部族民の役割を重点的に論じようとした研究と位置づけられるのは、J・ハビーブ、M・ヘルムズ、J・コスティナーであろう。ハビーブは、定住した遊牧民が主力となったイフワーン運動(حركة الإخوان)⁽³¹⁾を広め、イフワーン戦士となって国家形成において果たした軍事的役割などについて研究した[Habib 1978]。

ヘルムズは、アラビア半島の生態系から議論を始め、ワッハーブ主義における教義と政教関係の特質などにも言及しているのだが、建国期の主たる政治的行為者として取り上げているのは、アブドゥルアズィーズ国王やイフワーン戦

士である。ただしヘルムズは、サウディアラビアの国家形成の結果、遊牧部族の政治的独立性は喪失されたと結論している[Helms 1981]。

コスティナーは、サウディアラビア王国の建国期に関する歴史研究と、現代に関するサウディアラビア政治に関する、両方の研究を行っているが、建国期に関する研究と現代に関する研究では、部族政治に関する彼のアプローチが変化している。

建国期に関するコスティナーの研究は、サウード家とイフワーン運動の関係を対置させ、サウード家は、ベドウィン部族ではなく、定住民を支配基盤として中央集権国家の形成を志向した、と論じていた[Kostiner 1985: 306, 309]。だが現代に関する研究になるとコスティナーは、「中央集権化、経済発展、地域の平和は、新しく、深く浸透する価値観を生み出すことはなかった。サウディアラビアの政治体制は、世襲制の社会である」として、「部族は、サウディアラビアの価値システムの源泉として重要である」と述べている[Kostiner 1991: 226-227]。コスティナーは、現代サウディアラビアについて、価値観やアイデンティティーに着目して議論を展開し、部族が重要であるという結論を導いたが、その議論では彼が建国期の研究で展開したように、部族と国家を対置する視点はとられなかった。おそらくその理由は、コスティナーは、建国期に関する史料は入手できたが、現代サウディアラビアで現地調査をしたことがない限界に直面しているのだろう。

サウディアラビアの複合アイデンティティーの中では、部族的アイデンティティーの他に、ムスリム・アイデンティティーや国民としてのアイデンティティーも重要であると見なされている[中村 2001]。だがコスティナーは、それらとのアイデンティティー複合の問題について検討しないまま、サウディアラビアでは部族アイデンティティーが支配的であると結論したのである。

以上のように遊牧部族の役割について中心的に検討を行った研究があった一方で、サウディアラビア王国の国家形成において定住地の出現や都市商人が果

たした政治的役割を評価する研究が現れ始めている。これらの研究は、最新のタイプの研究であるが、サウディアラビア王国は、部族的価値観を変革することによって形成された国家であるという結論を提示している。

T・ニブロックは、商業の発展がサウディアラビア王国の建国の背景となっている点や、イフワーン運動では遊牧部族ではなくて定住民が中心となっていた点などを指摘しながら、定住民がサウード家の支配基盤であったと主張した[Niblock 1981]。

M・A・ガーリーは、ヒジャーズの都市商人が、13世紀以来、地域政治において強力な政治的影響力を行使してきたこと、またサウディアラビアの国家形成や経済政策にも影響を与えてきたことについて議論した[Elgari 1983]。

M・A・ヌアイムは、サウディアラビア王国の建国期における、遊牧経済と貢納的生産様式の特質を分析し、建国においてアラビア半島各地の商人が果たした財政上の役割について議論した[Nuaim 1987]。

P・H・クリムリーは、サウディアラビアの建国期から1980年代までの間に見られるレンティア経済の特質に関して議論を展開したが、その中で商人が果たした政治経済的な役割についても重視している[Krimly 1993]。

福田安志は、ニブロック、ガーリー、ヌアイム、クリムリーを引用していないが、19世紀から20世紀のアラビア半島における定住民と遊牧民の人口を推計し、「遊牧民ではなく都市や村の定住民が統治機構を形成し、遊牧民は統治機構の枠外に置かれていた」、「定住型部族民の国家統合の過程が、検討の中心となる」と結論した[福田 1992: 7-8]。

またサウディアラビア人による博士論文である以下の研究は、ワッハーブ主義の発生における政治社会的背景を考察した。Y・M・ジュハニー、M・A・フライフ、K・S・ダヒールは、それぞれの研究に強調点の相違はあるが、アラビア半島中央部において15世紀以降に、定住地の人口の増加や遊牧民の定住化が進行し、その結果として定住地や都市が発生したことがワッハーブ主義発生の社会的背

景であったと論ずる点で共通している[Juhany 1983], [Freih 1990], [Dakhil 1998]。

サウディアラビア人による研究成果には、彼らの部族観やイスラーム観が反映されている点を指摘できる。一般に都市化した現在のサウディアラビア人たちは、部族=ベドウィン=反イスラーム=反近代というイメージを強くもっている。部族=ベドウィン=反イスラーム=反近代というイメージは、欧米の研究者だけが抱くバイアスではない。ワッハーブ主義的価値観を信奉する彼らは、現在のサウディアラビア王国を、反イスラーム的で後進的なベドウィン部族の社会として蔑視する見解に異論を唱えたいのである。

とはいえ、定住地、都市、商人に着目するサウディアラビア人たちの研究は、今までに利用されてこなかった、アラブの年代記や英国記録や口頭伝承などを活用しており、十分に再検証されるに値するものとなっている。次稿以降では、定住地の増加、都市化、商人の役割に関して論ずる新しい先行研究が、実証や理論の面で成立しうるのかという点について検討する作業を進めたい。

歴史的アプローチによる先行研究では、アラビア半島は7世紀以来社会的変化を遂げておらず、ワッハーブ主義は7世紀のイスラーム教義の復興にとどまると主張する研究と、アラビア半島における社会的変化の発生に着目した研究が見られた。アラビア半島の社会的変化に着目した研究は、遊牧民を中心的に論じた一派と、遊牧民の定住化や都市化の過程に焦点をあてた一派に分けられた。

ヘルムズが例外ではあるが、遊牧部族民に関する研究は遊牧部族民の役割を、また都市や商人に関する研究は都市や商人の役割を強調する研究結果となる傾向がある。そこで、遊牧部族民と都市商人のそれぞれの役割を両者の関わりの中で対比させながら、国家の中で果たした役割を位置づける試みが求められる。

V むすびにかえて

サウディアラビアの政治に関する研究について、政治学的アプローチ、人類

学的アプローチ、歴史学的アプローチに分類しながら、レビューした。その結果、サウディアラビアの政治的特質については、不変の、あるいは停滞する部族政治であるという見解と、定住化と都市化が進行し、商人の役割が拡大した結果として国家形成が行われたという見解の二つに分けられることが明らかとなった。そして、定住化、都市化、商人に着目する一群の研究成果が積み上げられており、再検証に値することが確認された。

サウディアラビア政治の特質について、停滞する部族政治と見る見解は、アクターとして王族、イスラーム学者、部族集団に着目する。だが、サウディアラビアにおける政治や社会変化の大きな流れを軽視しており、サウディアラビアにおける部族政治を当然と見なし過ぎているようである。その結果、ときに実証面や概念の定義において荒さが残る研究も見られた。これらの研究の中には、サウディアラビア政治の後進性にとらわれるあまりに、蔑称として部族政治と見なしているものもあるようである。またベドウィン社会や砂漠の歴史にロマンを見いだしている場合もあったと言えるだろう。

他方、サウディアラビア政治の特質は、定住化、都市化、商人の役割の拡大によって国家が形成された点であると見なす見解は、定住地におけるフィールドワーク、史料のより適確な活用、新しい史料の発掘の成果に基づいていた。彼らは、王族、イスラーム学者、部族集団の重要性を否定したわけではないし、また、停滞する部族政治と見る論者と同様に、部族=ベドウィン=反イスラーム=反近代というイメージを抱いているが、サウディアラビアでは都市化と中央政府の権限の強化が進行しているという現実に立脚して研究を進めている点が鍵になっていると考えられる。

以上のような研究史上の対立点について解消を試みるために、サウディアラビア王国の中央政府の形成過程において遊牧部族民と都市民が果たした政治的役割を検討することが必要となっていると明らかにされた。

(1) 日本語では「サウジアラビア」という表記が使われる頻度が高いが、アラビア語ではالسعودية、英語では Saudi Arabia と表記されていることを鑑みると「サウディアラビア」の方がより適切な表記である。

(2) 1902年に首都リヤードを奪回した後のサウード家の支配地域の名称は、1902年から「ナジュドとその属領(نجد وملحقاته)」と称されていたが、1926年12月のヒジャーズの征服の完了に際して「ヒジャーズ、ナジュドとその属領(نجد، الحجاز، وملحقاتهما)」となった。そして1932年には「サウディアラビア王国」を宣言したのである。そこでそれぞれの時期の政府については、「ナジュド政府」、「ヒジャーズ政府」、「サウディアラビア政府」と略することとする。

(3) 「ワッハーブ主義者」は、自らを一神教の信者と意味の「ムワッヒド(موحد)」や、イスラーム復興主義者という意味の「サラフィー主義者(سلفي)」と称するが、「ワッハーブ主義者(وهابي)」とは、称しない。「ワッハーブ主義者(Wahhabi)」という呼称の由来にははっきりしない点もあるが、敵対するオスマン帝国や部族が蔑称として使い始めた名称だったというのが定説となっている[عبيدة 1983: 76-77], [نوى 1984]。だが本稿では、彼らの宗教的固有性を表す分析概念が必要なので、「ワッハーブ主義」という語を用いることとする。サウード家、ウラマー、ムタウウィウ (مطوع: 市場監督官)、イフワーンが「イスラーム」と見なす「イスラーム」は、偶像崇拜などの「逸脱行為」(بيدأ)を禁止するなどの特徴で知られる、いわゆる「ワッハーブ主義」である。「ワッハーブ主義」に関する定義は、以下を参照[中村 2007: 24-29]。

(4) 本稿では、ワッハーブ主義に基づくサウード家の支配を「サウード家・ワッハーブ主義複合支配」という概念で呼称することとする。

(5) 支配基盤とは、ある政権に政治的な支持を与え、政権の存続や強化のための支援を行ったり、一定の役割を担う社会集団や社会階層を指すものとする。

(6) アブドゥルアズィーズ国王の生年は、公式には1880年であったが、1876年説も有力であるとの見方もある[زركلي 1992: 57-58]。アブドゥルアズィーズの称号は、以下ように変遷した。1902年にリヤドを奪回してからは「ナジュドとそのベドウィンのアミール(أمير نجد ورئيس عشائرها)」と称した。1915年に英国とウガイル条約を締結した後、英国に対しては、「ナジュド、アフサー、ジュバイルとその属領のハーキム(حاكم لنجد والاحساء والجبيل وتوابعها)」と称した。1919年にアシールを占領した後、1920年のマジュリスで「ナジュドとその属領のスルターン(سلطان نجد و ملحقاتها)」と称することとなった。1925年にヒジャーズを併合した後では、「ヒジャーズの王とナジュドとその属領のスルターン(ملك الحجاز و سلطان نجد و ملك الحجاز و ملحقاتها)」と称した。また1926年には「ヒジャーズとナジュドとその属領の王(ملك الحجاز و نجد و ملحقاتها)」と改称した。1932年9月23日以後は「サウディアラビア王国の王(ملك مملكة العربية السعودية)」と称した。

(7) ムハンマド・イブン・アブドゥルワッハーブは、「シャイフ」という尊称で呼ばれるようになった。以下では、サウディアラビアにおける尊称に従って彼を「シャイフ」と略する。またその子孫の一族は、「アール・アッ=シャイフ家(آل الشيخ)」と称するようになった。以下では、「シャイフ家」と略する。

(8) この盟約に関しては、例えば以下を参照[フィルビー 1999: 84-85], [中田 1996: 209], [森 2001: 143]。

(9) 今まで日本では、学校教科書なども含め、「第一次ワッハーブ王国(دولة الوهابية الأولى)」や「第二次ワッハーブ王国(دولة الوهابية الثانية)」、あるいは単に「ワッハーブ王国」という呼称が用いられてきた。しかしどちらの国家にも、「王(ملك)」と称した国家元首は存在していないので、「王国」は適切な名称ではないだろう。現在、アラブ人研究者の間では、「王国」という呼称は用いられていない。日本では、福田安志が「第一次サウード朝」や「第二次サウード朝」という呼称の使用を提唱している。ただし彼は、「サウード」ではなく、「スウード」が正しいと補足している[福田 1995: 112], [福田 1996: 130-131]。本稿では、「第一次サ

ウード朝(دولة السعودية الأولى)」と「第二次サウード朝(دولة السعودية الثانية)」という名称を用いることにする。なお本文では便宜上、第一次サウード朝と第二次サウード朝を合わせて「サウード朝」と略することがある。

(10)本稿では、サウディアラビア王国が、三回目のサウード家の支配によるものであることから、文脈によっては1902年から1932年の支配を「第三次サウード朝」という呼ぶこととする。

(11)[Silverfarb 1979], [Silverfarb 1981], [Silverfarb 1982], [Leatherdale 1983], [Zaydey 1989], [Westrate 1992]など。

(12) アラブ湾岸諸国の歴史を世界システム論の視点から論じようと試みた研究として、[Naqeeb 1990]があげられるが、サウディアラビアに関する議論は主テーマとされていない。

現代中東の国家体制の成立については、列強による恣意的な境界設定がなされたとする説と、植民地化がなされる以前から地域の大まかな区分が生れていたとする説の両方があることを伊能武次が紹介した[伊能 1994: 17-19]。後者は、アラブ諸国の枠組みが、植民地化以前に既に形成されていた地域性に基づいて決定された点を強調する[Harik 1987]によって問題提起された。

(13)地理概念としてのナジュドは、海岸部を除くアラビア半島中央部である。「アーリド(العارض)」(現リヤード州)、「ガシーム(القصيم)」、「ジャバル・シャンマル(جبل ثمر)」を全て含んだ地域として用いることにする。

(14)例えば、[Baştuğ 1998]を参照。

(15)サウード家の系図に関する最も包括的なデータは[Bligh 1984]を参照。主な王族に関する新しい系図では以下を参照[中村 2007: 8-9]。

(16)大野元裕は、フィリップ・ヒッティによる、「天幕、氏族(カウム)、部族」というベドウィン部族の階梯組織に関する定義や、血縁関係以外にも人々の間には協力関係があるというD・アイケルマンによる指摘をとりあげつつ、部族とは、血縁関係にせよ地縁にせよ、「意識のレベルで形成された人間集団」の性

格が強いとしている。彼は、アラブ首長国連邦のバニー・ヤースにおける協業が、家族、氏族、部族のいったいどれを単位としていたのか全く明確ではない[大野 1995: 160, 162]。

(17) この論点については、[保坂2001]では論じられていない。

(18) (7)を参照。

(19)例えば、イエメンの部族と政府に関する以下の研究を参照[Dresch 1989]。

(20)「伝統の創造」という概念については、[ホブズボウム 1992]が代表的である。

(21)あるいはハサー(الحسا)とも呼ばれる。

(22)例えば、「部族」『文化人類学』[弘文堂 1987: 650]を参照。

(23)このような著作は多数あるが、以下をあげておく[大塚 1998: 273-283]。

(24)例えば日本では、主にアフリカや東南アジアをフィールドとする福井勝義が、差別的な概念である「部族(tribe)」や「種族(tribe)」概念の使用を停止して、「民族」概念を使用するべきであると提唱してきた[川田 1988: 322-323], [福井 1999: 174-181]。

(25) ﻯ は、日本語に転写される際には従来カ行に転写されてきたが[日本イスラム協会 1982: vi], [大塚和夫 2002: 11], [日本イスラム協会 2002: viii]、アラビア半島における発音により近づけるために本稿では、ガ行に転写することを基本方針とする。ただし、「カフターン(قحطان)」のような有名な名詞に関しては、ガ行ではなく、従来からのカ行とする。

(26)M・A・フライフは、「非部族民(خضيريون)」の起源は、9世紀から11世紀にナジュドを支配したウハイディル朝であるという説を唱えている。ウハイディル朝による厳しい反部族政策の結果、部族がナジュドから流出したとき、残された人々が、部族的アイデンティティや結合を喪失した集団となって「ハディーリユーナ(خضيريون)」と呼ばれ始めたという。「非部族民」は、犯罪や戦争で敗北したり、部族的アイデンティティを喪失したり、貧困に陥ったなどの理由

により、職人などの卑しい職業に就かざるをえなかったという [Freih 1990: 204], [Dakhil 1998: 141]。

(27)コウルは、彼が研究対象としたムッラ族が、サウディアラビアの大部分の遊牧民とは異なり、農民のコミュニティーとの関係が薄いことを指摘している [コウル 1982: 36]。また W・ランカスターは、ルワーラ族が「最もベドウィンのだった」ことが、調査対象として選択した理由の一つであると述べている [Lancaster 1981: 3]。

(28)コウルは、[コウル 1982]の後、新たなテーマに取り組んでいると言えるだろう。

(29)例えば以下を参照 [الريحاني 1988], [المختار 1956], [هنلول 1961]。

(30)「…この人間の湾流は、北方につらなるオアシスに沿い、タドモール、ジャウフ、ワディ・シルハンなどを経て、シリア、メソポタミア地方へ進んだ…」 [ブノアメシャン 1962: 6]。

(31) 1913 年から 1930 年までの間、ナジドでは、遊牧部族民が、従来の遊牧生活を捨てて新しい定住地「フジャール(ヒジュラ)(pl. هجر hujar/ag. هجرة hijrah)」へ定住し、「ワッハーブ主義」を積極的に受容する運動が広まった。サウディアラビア王国の建国(1932 年)に貢献したことで知られるイフワーン運動である。

参考文献

- بسلييف، أ. 1986. تاريخ مملكة العربية السعودية. مسكو. دار التقدم.
- الخطيب، سلوى. 1981. توطين البدو في مملكة العربية السعودية: دراسة اجتماعية للهجرة الغطف. رسالة ماجستير، كلية الآداب بجامعة الملك سعود.
- الريحاني، أمين. 1988. تاريخ نجد وملحقاته وسيرة عبد العزيز بن عبد الرحمن آل فيصل آل سعود، ملك الحجاز ونجد وملحقاتهما. بيروت. دار الجيل. ط6.
- الزركلي، خير الدين. 1993. شبه الجزيرة في عهد الملك عبد العزيز. بيروت. دار العلم للملايين.

عميرة, عبد الرحمن. 1983. الشبهات التي أثرت حول دولة الشيخ الإمام محمد بن عبد الوهاب, بحوث الأسبوع الشيخ محمد بن عبد الوهاب رحمه الله. الجزء الثاني. الرياض. جامعة إمام محمد بن سعود الإسلام. ص 15-97.

المختار, صلاح الدين. 1956. تاريخ المملكة العربية السعودية في ماضيها وحاضرها. ج 2. بيروت. دار مكتبة الحياة.

الندوى, سعود. 1984. محمد بن عبد الوهاب, مصلح مظلوم, مقترى عليه. الرياض. نقرة, التهامي. 1983. محمد بن عبد الوهاب و دعوته إلى التوحيد, جامعة إمام محمد بن سعود الإسلام, بحوث الأسبوع الشيخ محمد بن عبد الوهاب رحمه الله. الجزء الأول. الرياض. جامعة إمام محمد بن سعود الإسلام. ص 37-72.

- Abir, Mordechai. 1993. *Saudi Arabia : Government, Society and the Gulf Crisis*. London: Routledge.
- Abir, Mordechai. 1987. "The Consolidation of the Ruling Class and the New Elites in Saudi Arabia." *Middle Eastern Studies* 23 (2): 150-171.
- Abir, Mordechai. 1988. *Saudi Arabia in the Oil Era: Regime and Elites, Conflict and Collaboration*. London: Croom Helm.
- Algozaibi, Ghazi A. 1991. *The Gulf Crisis: An Attempt to Understand*. London: Kegan Paul International.
- Altorki, Saraya and Cole, Donald P. 1989. *Arabian Oasis City: the Transformation of Unayzah*. Austin: University of Texas Press.
- Anderson, Lisa, 1991. "Tribe and State: Libyan Anomalies." In Philip S. Khory & Joseph Kostiner. *Tribes and State Formation in the Middle East*. London: I.B.Tauris, 288-302.
- Ayubi, Nazih N. 1999. *Over-stating the Arab State: Politics and Society in the Middle East*. London: I.B. Tauris Publishers.
- Baştuğ, Sharon. 1998. "The Segmentary Lineage System: A Reappraisal."

- In Joseph Giant & Anatoly M. Khazanov. *Changing Nomads in a Changing World*. Brighton: Sussex Academic Press, 94-123.
- ブノアメシヤン. 1962. 『砂漠の豹イブンサウド』 牟田口義郎・河野鶴代訳、筑摩書房=Benoist-Mechin, J. 1955. *Ibn-Seoud ou la naissance d'un Royaume*.
- Chaudhry, Kiren A. 1997. *The Price of Wealth: Economics and Institutions in the Middle East*. Ithaca: Cornell University Press.
- コウル, Donald P. 1975. 『遊牧の民』 片倉もとこ訳, 社会思想社=Cole, D.P. 1974. *Nomads of the Nomads: The Al-Murrah Bedouin of the Empty Quarter*. Chicago.
- Dakhil, Khalid S. al-. 1998. *Social Origins of the Wahhabi Movement*. Ph.D. dissertation. University of California.
- Dallal, Ahmad. 1993. "The Origins and Objectives of Islamic Revivalist Thought, 1750-1850." *Journal of American Oriental Society* 113 (3): 341-359.
- Elgari, Mohamed A. 1983. *The Pattern of Economic Development in Saudi Arabia as a Product of Its Social Structure*. Ph.D. dissertation. University of California.
- Fabietti, Ugo. 1982. "Sedentarization as a Means of Detribalization: Some Policies of the Saudi Arabian Government Towards the Nomads." In Tim Niblock ed. 1981. *State, Society and Economy in Saudi Arabia*. London: Croom Helm, 186-197
- Farra, Taha El-. 1973. *The Effects of Detribalizing the Bedouins on the Internal Cohesion of an Emerging State, Saudi Arabia*. Ph.D. dissertation. University of Pittsburgh.
- 福井勝義. 1999. 「戦いの進化と民族の生存戦略」 福井勝義編『人類にとって

- 戦いとは 1: 戦いの進化と国家の形成』161-184.
- 福田安志. 1992. 「アラビアにおける部族社会と国家統合: サウジ・クウェートなどでの民主化問題の底流を探る」『現代中東研究』11: 2-21.
- 福田安志. 1995. 「マシュリク(近現代 アラビア半島)」三浦徹・東長靖・黒木英充『イスラーム研究ハンドブック』111-116.
- 福田安志. 1996. 「王政とイスラーム主義-湾岸アラビア諸国を中心に」山内昌之編『イスラム原理主義とは何か』岩波書店: 117-142.
- 福田安志. 2007. 「サウジアラビアにおける統治体制」福田安志編『湾岸、アラビア諸国における社会変容と国家・政治』アジア経済研究所
(http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Report/pdf/2006_04_35_04.pdf, 2008年5月10日参照).
- Freih, Mohamed A. al-. 1990. *The Historical Background of the Emergence of Muhammad Ibn 'Abd al-Wahhab and His Movement*. Los Angeles, Ph.D. dissertation. University of California.
- Gause III, Gregory. 1989. "Book Review, Saudi Arabia in the Oil Era: Regime and Elites; Conflict and Collaboration." *Middle Eastern Studies* 25 (4): 569-570.
- Goldberg, Jacob. 1986. *The Foreign Policy of Saudi Arabia*, Cambridge: Harvard University.
- Habib, John S. 1978. *Ibn Sa 'ud' s Warriors of Islam: The Ikhwan of Najd and Their Role in the Creation of the Saudi Kingdom, 1910-1930*. Leiden: J.S.Brill.
- ハリディー. 1982. 『現代アラビア: 石油王国とその周辺』岩永博訳, 法政大学出版局=Halliday, Fred. 1974. *Arabia without Sultans*, New York: Vintage Books.
- Helms, Christine M. 1981. *The Cohesion of Saudi Arabia: Evolution of*

- Political Identity*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- ホブズボウム, E. & レンジャー, T. 1992. 『創られた伝統』紀伊国屋書店.
- 保坂修司. 1996. 「信仰・部族・近代化」小杉泰編『イスラームに何が起きているか』平凡社: 138-156.
- 保坂修司. 2001. 「サウディアラビアの王権－祭祀王ファハド－」『サウディアラビアの総合研究』日本国際問題研究所: 125-141.
- Hudson, Michael C. 1977. *Arab Politics: the Search for Legitimacy*, London: Yale University Press.
- 伊能武次. 1994. 「中東諸国の政治と国家へのアプローチ」伊能武次編『中東における国家と権力構造』アジア経済研究所: 3-31.
- Juhany, Uwaidah M. al-. 1983. *The History of Najd prior to the Wahhabis: a Study of Social, Political and Religious Conditions in Najd during Three Centuries Preceding the Wahhabi Reform Movement*. University of Washington =2002. *Najd before the Salafi Reform Movement: Social, Political, and Religious Conditions during the Three Centuries Preceding the Rise of the Saudi State*. Reading: Ithaca Press.
- Katakura, Motoko. 1977. *Bedouin Village*. Tokyo: Tokyo University Press.
- 川田順造, 福井勝義. 1988. 『民族とは何か』岩波書店.
- ラックナー. 1981. 岸田聰訳『砂の王国サウジアラビア』ダイヤモンド社
- =Lackner, Helen. 1978. *A House Built on Sand*.
- Kostiner, Joseph. 1985. "On Instruments and the Designers: The Ikhwan of Najd and the Emergence of the Saudi State. " *Middle Eastern Studies* 21 (3): 298-323.
- Kostiner, Joseph. 1991. "Transforming Dualities: Tribe and State Formation in Saudi Arabia." In Philip S. Khory & Joseph Kostiner. *Tribes and State Formation in the Middle East*. London: I.B.Tauris, 226-251.

弘文堂.1987.『文化人類学事典』.

Krimly, Rayed Khalid. 1993. *The Political-Economy of Rentier States: A Case Study of Saudi Arabia in the Oil Era, 1950-90*. Ph.D. dissertation. George Washington University.

Lancaster, William. 1981. *The Rwala Bedouin Today*. Cambridge: Cambridge University Press.

Leatherdale, C. 1983. *Britain and Saudi Arabia 1925-1939*. London: Frank Cass and Company Limited.

McLoughlin, Leslie. 1993. *Ibn Saoud: Founder of a Kingdom*. Oxford: St. Antony's College.

Metz, Helen C. 1993. *Saudi Arabia: a Country Study*. Washington D.C: Library of Congress.

森伸生. 2001. 「サウディアラビアの体制派宗教勢力」『サウディアラビアの総合研究』日本国際問題研究所: 142-180.

中村覚. 2001. 「サウディアラビア王国の国民アイデンティティの形成」『サウディアラビアの総合研究』日本国際問題研究所: 81-124.

中村覚編. 2007. 『サウジアラビアを知るための65章』明石書店.

中田考. 1996. 「サウディアラビアとワッハーブ派の政治経済理念」福田安志編『GCC諸国の石油と経済開発－石油経済の変化のなかで－』アジア経済研究所: 207-233.

Niblock, Tim. 1982. "Social Structure and the Development of the Saudi Arabian Political System." In Tim Niblock ed. *State, Society and Economy in Saudi Arabia*. London: Croom Helm, 75-105.

日本イスラム協会監修(嶋田襄平, 板垣雄三, 佐藤次高). 1982. 『イスラム事典』平凡社.

日本イスラム協会監修(嶋田襄平, 板垣雄三, 佐藤次高). 2002. 『新イスラーム

事典』 平凡社.

Nuaim, Mishary A. al-. 1987. *State Building in a Non-Capitalist Social Formation: the Dialectics of Two Modes of Production and the Role of the Merchant Class, Saudi Arabia, 1902-1932*. Ph.D. dissertation. University of California.

小串敏郎. 1996. 『王国のサバイバル：アラビア半島三〇〇年の歴史』 日本国際問題研究所.

大野元裕. 1995. 「商人と首長家—アブドビとドバイにおける部族的社会とその変遷」『日本中東学会年報』 10: 157-177.

大塚和夫, 小杉泰, 小松久男, 東長靖, 羽田正, 山内昌之編集. 2002. 『岩波イスラーム辞典』 岩波書店.

フィルビー. 1997. 『サウジ・アラビア王朝史』 富塚俊夫、岩永博訳、法政大学出版部=Philby, H. St. John B. 1955. *Saudi Arabia*. London: Ernest Benn Ltd.

酒井啓子. 1995. 「『原型の回復』と『建国神話』：湾岸諸国の国境紛争」酒井啓子編『イスラーム世界の解説』 お茶の水書房: 83-121.

Sefran, Ali Mashhor al-. 1974. *The Essence of Tribal Leaders' Participation Responsibilities and Decisions in Some Local Government Activities in Saudi Arabia: A Case Study of the Ghamid and Zahrah Tribes*. Ph.D. Dissertation. University of Kansas.

Shamekh, Ahmed A. 1975. *Spatial Patterns of Bedouin Settlement in al-Qasim Region, Saudi Arabia*. Ph.D. dissertation. Kentucky University.

Silverfarb, Daniel. 1979. "The Philby Mission to Ibn Sa'ud 1917-1918." *Journal of Contemporary History* 14 (2): 269-286.

Silverfarb, Daniel. 1982. "The British Government and the Tribal Revolt Against Ibn Saud, 1927-1930." *International History Review* 4: 222-48.

- Silverfarb, Daniel. 1982. "The Treaty of Jiddah of May 1927." *Middle Eastern Studies* 18 (3): 276-285.
- スミス, ウィルフレッド・キャントウェル. 1974. 『現代におけるイスラム』 中村廣治郎訳, 紀伊国屋書店=Smith, Wilfred C. 1957. *Islam in Modern History*, Princeton University Press.
- Tapper, Richard, "Anthropologists, Historians, and Tribespeople on Tribe and State Formation in the Middle East." In Philip S. Khory & Joseph Kostiner. 1991. *Tribes and State Formation in the Middle East*. London: I.B.Tauris, 48-73.
- Tibi, Bassam. 1997. *Arab Nationalism between Islam and the Nation-State*, New York: St.Martin's Press.
- Troeller, Gary. 1976. *The Birth of Saudi Arabia: Britain and the Rise of the House of Sa'ud*, London: Frank Cass.
- 富塚俊夫. 1993. 「ナショナルアイデンティティーとしての部族意識」 酒井啓子編『国家・部族・アイデンティティー』 アジア経済研究所.
- Westrate, Bruce. 1992. *The Arab Bureau: British Policy in the Middle East 1916-1920*. Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press.
- Yassini, Ayman Al-. 1980. *Religion and State in the Kingdom of Saudi Arabia*. Colorado: Westview Press.
- Zaydey, H.A.M. Al-. 1989. *Saudi-British Diplomatic Relations 1918-1920: The Khurma Dispute*. Ph.D. dissertation. Miami University.

付記

本稿は、博士論文『サウディアラビア王国の国家形成と支配基盤: 都市民と遊牧部族民の政治的役割の分析にむけて』（2002 年東北大学国際文化研究科受理）の第1章から第2章第3節までに加筆修正したものである。

(なかむら・さとる 神戸大学大学院国際文化学研究科・准教授
中東政治)